

〈幼児教育〉

思いやりを育むための援助の工夫 — 忍者ショーに向けたグループ活動を通して —

宜野湾市立志真志幼稚園 教諭 石川 めぐみ

I テーマ設定理由

近年、情報化やグローバル化といった社会的変化が人間の予測を超えて進展するようになってきている。また、少子化や核家族化などに伴い、家庭や地域の中で人と関わる経験が少ないまま育ってきている幼児も多い。「様々な情報の出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置づけ、社会をどう描くかを考え、他者と一緒に生き、課題を解決していくための力の育成が社会的な要請となっている」と中央教育審議会答申(平成 28 年 12 月)の中で述べられている。

幼稚園教育要領の人との関わりに関する領域、人間関係のねらいの中で「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」とあり、内容には「友達と関わりを深め、思いやりをもつ」と示されている。内容の取り扱いでは、「人に対する信頼感や思いやりの気持ちは葛藤やつまづきをも体験し、それらを乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること」と述べられている。幼児が友達と一緒に工夫したり協力したりできる活動の中で、時には葛藤やつまづきをも経験し、それを乗り越えていく過程の中で友達に対しての信頼感や思いやりの気持ちは芽生えてくると考える。

本園の幼児の実態としては、好きな遊びを見つけて遊ぶ子は多いが、一人遊びや単発的な遊びも多く見られる。自己主張のぶつかり合いによるトラブルや、反対に主張出来ずに泣いてしまう子など、自分達で相談したり、解決したりしながら遊びや生活を進めていくことが難しいという課題がみられる。それは、互いの思いを伝え合いながら関わりを深めていく体験が不足していることが要因であり、相手に対しての思いやりの気持ちをもつことが難しい実態があると考え。では、思いやりを育むために、子ども同士の関わり合いを保育の中にどのように取り入れていけば良いのだろうか。

これまでの私の保育を振り返ってみると、どの子も集団に関われるようにと安易にグループ活動を取り入れているところもあった。自身の反省を踏まえ、今回は教師の意図したグループ編成の工夫から保育を展開していく。今井和子(1992)はグループという集団を考えると、「個と個がどんな関わりをもちながらつながりあえる集団を成すか、という視点をもたなければその集団は単なる枠組みになってしまう」と述べており改めてグループ活動を多様な視点から捉え直す必要性を感じた。

そこで本研究では、思いやりを育むために、意図したグループ編成の工夫をする中で、忍者ショーに向けた活動に取り組んでいきたい。それは幼児が時には葛藤やつまづきをも経験し、次第に思いやりの気持ちは芽生えていくのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

教師が意図したグループ編成の工夫をする中で、忍者ショーに向けた活動に取り組んでいく。そのことにより、時には葛藤やつまずきをも経験し、思いやりの気持ちが次第に芽生えていくであろう。

III 研究構想図

